望郷の歌　石光重清

望郷の歌

石光眞清

龍星閣版

昭和三十三年十月二十日　印刷
昭和三十三年十月廿五日　発行
昭和四十年六月一日　第四刷

定価五百六十円

著者　石光真清

刊行者　澤田伊四郎
東京都千代田区九段四ノ一三

発行所　龍星閣
東京都千代田区九段四ノ一三
振替口座東京三三六
電話九段(261)九二七二

印刷・精興社　製本・牧製本株式会社

望郷の歌

石光真清の手記

目次

泥濘の道……五
親友の死……三〇
老大尉の自殺……五二
黄塵の下に……六一
文豪と軍神……八〇
失意の道……九二
海賊会社創立記……一二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二つの遺骨と女の意地……一五三
海賊稼業見習記……一七一
望郷の歌……二〇八
家族……二三八

一、本書『望郷の歌』は故石光真清がひそかに綴り遺した『城下の人』『曠野の花』に続く明治篇の最後の手記である。以上三著の初版を編刊後一年を経過して、大正篇として『誰のために』を刊行した。『誰のために』は著者が大正から昭和にわたる手記、特に革命期のシベリヤ出兵事情などをまとめたもので、本書の続篇である。従って故石光真清の手記は全四巻をもって完結する。

二、四著それぞれの書名、章題、区分はすべて手記によらず、また文体、会話、地名などは出来るかぎり現代風に改めた。

三、四著をなす手記と、それに関する資料は厖大複雑であり、もともと発表する意思で書かれたものでなく、死期に臨んで著者自ら焼却を図ったものである。その中には自分を他人の如く架空名の三人称で表わしたものさえ多く、その照合と考証に多くの年月と慎重な努力を要した。従って焼却された部分や脱落箇所の補綴や、全篇に亘っての考証は、編者（嗣子石光真人）が生前の著者から直接聞き正し、また当時の関係者から口述を得たものによって行ったほか、生前の著者を知る多くの人々の協力によって、こゝに全容の完成を見るに至った。しかし事実を述べるに、なんらの作意を弄せず、私見もさし挿んでいない。

泥濘の道

一

国の運命と人の行末が、細やかに結ばれていた時代である。

大陸へ渡る道すがら、出航間際の船橋（デッキ）に身を寄せて、これが見納めではあるまいかと、緑の山々を瞼のうちに貪りながら別離の銅鑼（ドラ）の音に胸をうたれるのも、これで幾たびであろうか。そのたびに私は幾つか歳を重ね、身分もまた、そのつど変っていた。

二十八歳の青年将校として初陣の鹿島立ちした日清の役から無事に帰還して、それから十年、日露開戦の布告で満洲から母国に引揚げたと思った途端にまたこのたびの出征である。

このまゝ暫くの間、東京の赤坂青山北町六丁目の奥まった静かな家に妻子とともに身心を休めて、桜の三月、四月を過してから、前途の身の振り方を考えようと、秘かに楽しみさえ抱いて帰って来たのである。すでに中年に入った年輩ではあったが、少しも後悔はしていなかった。満洲で過した四年間の苦労を考えれば、どんな仕事にも耐え得る自信があったし、新しい半生の開拓にも希望が

持てた。しかるに……自宅に帰り着いて、久しぶりに和服に着かえ、幼い長女と次女を傍らにして食卓に寄ると、妻が緑茶とともに差出した書状は、意外にも召集令状と第二軍司令部付副官を命ずる辞令であった。妻は大きな瞳で微笑して私の表情を読もうとした。すでに覚悟が出来ていたのであろう。手にとって見ると、この召集令状は私の満洲引揚の途中に出されたものであった。戦争の当初から私のような経歴の予備将校が司令部の副官として召集されることはまずないことだから、まったく予期しないことであった。それだけに、この召集には特別の計いがあったに違いない。私のロシア留学を後援激励してくれた田村怡与造大佐は、その才能と気骨を惜まれてすでに明治三十六年十月一日病死（当時中将）していたが、田村中将なきあとは、恐らく私の行動について理解を持っていた町田経宇少佐（後の陸軍大将）田中義一大佐（後の陸軍大将、男爵、総理大臣）の特別の建議によって第二軍副官に採用し、満洲における私の経験を作戦上に生かすとともに、私の身分を差当り保障しようと云う温情によるものであったと思う。私はこれらの温情を、ありがたいと思い、心から感激しないわけではなかったが、第二の人生を一市民として開拓しようと秘かな悦びを抱いて帰国した矢先であったから、出鼻を叩かれたように戸惑ってしまった。

驚きをかくし、予期していたような素振りで私は妻にうなずいてから、丁寧に召集令状と辞令をたゝんで食卓の片端に置いた。そして言うべき言葉に迷った。妻も挨拶に窮している様子で、食卓

の上を布巾で幾たびか拭っていた。こんな戸惑いも、私と母をとり囲む親戚知己の祝の言葉と笑声の中にすぐ消えた。凱旋と出征が一緒になってしまったのである。私の留守中はおそらく、ひっそりと静もり返っていたわが家は、数日の間大変な賑いが続いて、幼い次女の昼寝を妨げた。

その間、私は忙しかった。私と一緒にハルピンや大連の写真館から引揚げて来た支配人山本逸馬、田中幸三郎、通訳秋山運次郎等館員一同の就職を考えなければならなかったからである。私が召集されずに何か事業を始めるのであったら、彼等に協力を求めたであろうが、私は再び大陸に戻らなければならなかったし、留守にしていた内地には、これといって彼等を容れ得る職場に縁がなかった。考えてみたが参謀本部の田中義一大佐に相談するほかに良い思案も浮ばなかった。といっても同大佐に特別の関係があったわけではない。私がハルピンに情報本部としての菊地写真館を経営していた時、当時露都ペテログラードに駐在武官をしていた同大佐が、帰任の途中で宿泊し、たまたま居合せた志士や浪人を交え、館員たちとも一緒に連日連夜、痛飲放談して国家の将来を語り合ったゞけの関係であった。まことに心細い話である。しかも田中大佐は国運を賭けての大戦争のさ中、枢機に与かる地位にあって、近く総司令部の参謀として大山巌大将（後の元帥）の幕下に加わる逸材であった。写真館員の就職などという些細な雑事に割く時間などはあるまいと思ったが、どう考えてみても、このような事情を理解して本気に受けとってもらえる人は同氏以外にはないと思われた。

大事の前にはまことに些細な雑事に過ぎないが、大事は捌き得ても、些細な雑事を捌き得ない人が多いものである。ところが私自身にとっては些細な雑事どころか、大きな問題であった。生死を共にして危険な諜報活動に従事した写真館の館員に対して、少しも報ゆることなく退去命令に服さなければならなかったから、このまゝ私が出征して満洲の曠野に果てたならば生涯の痛恨事である。出征の日時が迫っていたので、挨拶かたがた参謀本部を訪うと、田中義一大佐は多忙な時間を割いて私の無事帰国を祝い、ハルピンの思い出を語って屈託がなかった。そして、遠慮がちの私の願いを即座に引受けてくれたのである。

このように私自身も心を砕き、先輩の田中義一大佐も、出征軍の通訳、酒保の請負などの仕事を細々と斡旋してくれたが、館員たちは再び満洲に渡ることを嫌って、一人去り二人去り、それぞれ故郷に散ってしまった。考えてみれば、それが人情かもしれない。つい数日前、私自身がわが家に帰り着いて召集令状を手にした時の、あの心境を省みれば、こんな斡旋をしたこと自体がまことに不人情な見当ちがいであったろう。ありがた迷惑な好意の押売りであったかも知れない。無事に凱旋出来たら将来報いることも出来ようかと考えて、この問題は一応打切ることにした。

召集令状に従って陸軍大学校内で編成中の第二軍司令部に出頭しなければならない。出頭の日付はすでに過ぎている。帰国の翌日、わが家の座敷には、もう将来着用の日はあるまいと考えていた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

陸軍歩兵大尉の軍服、軍帽が、樟脳の香りを漂わせて整えられ、かつて橘周太（後の軍神橘中佐）より貰った橘家の家宝左一文字の軍刀が床の間に飾られていた。妻辰子は同郷熊本の軍人の家に生れ武士気質の祖母からことのほか愛されて育ったゞけに、このような場合にも冷静に手廻しよく準備が整えられた。余り手廻しよくされると心淋しいものだが、これも私の予期しなかった召集から来る家族への愛情の故でもあり、秘かに楽しみにしていた第二の生涯の出発が中断された心残りからでもあったろう。

召集令状をポケットに収めた軍服を久しぶりに着けると、固い詰襟が咽喉を締めつけ、腰の帯劔が気になった。ロシア留学以来、暖かい季節にはゆったりしたルバシカを着て暮していたし、背広服が身についてしまった。軍服を脱いだのはロシア留学に出かけた明治三十二年であるから、五年ぶりの着用である。

出頭すると首脳部はすでに出来上っていた。司令官陸軍大将奥保鞏（後の元帥）参謀副長陸軍歩兵中佐由比光衛（後の大将）参謀歩兵少佐山梨半造（後の大将）騎兵少佐鈴木荘六（後の大将）砲兵少佐石坂善次郎（後の中将）等々で、私は予備歩兵大尉から副官部副官に任じられていた。嬉しいことには、管理部長は幼年学校時代から兄と仰ぐ歩兵少佐橘周太であった。異色の人としては軍医監森林太郎（森鷗外）が軍医部長に就任していた。

こうして、あわたゞしく桜の季節を過して、老母や妻子と再び別れて大陸に向ったのは四月も終ろうとする日であった。広島宇品港の岸壁には市民の群れが日の丸の小旗を波打たせて、勇士を送る歌を唱い、万歳のときの声をあげていた。

私は東方の山々を望んで胸のうちに老母と妻子に何を祈るともなく合掌した。この国難が無事に乗越えられて、国土が敵の軍靴に踏まれることさえなければ、私亡きあとも母や妻子は細々ながらも生活していかれるであろう。だがこの戦いの帰趨は全く予想もつかなかった。私一人の生涯を考えても、この数年の間に遭遇した事件と、これに応じて変った私の一身上のことは嘗って想像も及ばないことばかりであった。明日のために、次代のために生きているつもりでいても、私たちは明日のことも次代のことも、本当には知らないのである。もし知ることが出来たら私たちは、踵を返して戻ってしまうかも知れない……こんなとりとめのないことを考えてぼんやり船橋に身を寄せていると、突如、出港を知らせる銅鑼が鳴り、岸壁の群衆も船上の将兵たちも一せいに身をおどらせて万歳万歳を叫び交して、しばらくは止まなかった。

二

宇品港の岸壁が白い航跡の彼方に遠ざかって、美しい瀬戸内海の風物が次々に私たちの視界を流れていった。大部分の将兵たちは眺めるともなく甲板の上に立ちすくんでいた。死地に赴くものにとっては美し過ぎる風景である。

「菊地正三さんではありませんか」

過去四年の間、聞き馴れた仮りの名であるが、菊地と呼ばれて私は虚を衝かれたようにギクリとした。ふり返ると兵士たちの群れの中に黒詰襟服の男が合掌して微笑していた。襟にかけた略式の袈裟が僧侶であることを示していた。そして次の瞬間、この男が意外にもハバロフスクで初対面以来、満洲各地で因縁に結ばれた本願寺布教僧で特別任務を持つ安倍道瞑師であることがわかった。

「おゝ道瞑さんではないか！」

意外な場所で意外な人に逢うものである。

見交した眼の底に汲み尽せない思いが籠められていた。同師は第二軍司令部付の通訳の資格で従軍したのだそうである。奉天で一別以来の経過を問おうともしないし、語ろうともしない。四年前の初対面の時からたゞの坊主でないことを知ったが、同師もまた私をたゞの満洲浪人だとは思っていなかったであろう。こうして私が初めて陸軍歩兵大尉の軍装で対面しても、同師は驚きもしなかった。ハバロフスクの破れ布教所で、汚れたルバシカの苦力姿で初めて会った時と少しも変らない

態度である。私にとっては終生忘れることの出来ないあの懐しい顔、同師と一緒にいるだけで救われたような気持になる。せっかく無事に帰国して、一市民として第二の生涯を開拓しようと思っていた矢先に、再び満洲に伴れ戻される……そのようなぎこちない気持に捉われがちな私の眼の前に、同じ運命を辿りゆく同師の微笑を得てからは、懐しい第二の故郷に帰ってゆくような、半ば諦めに近く半ば楽しみに近い気持に移っていくのを感じた。私のような凡人にとっては苦しみにも楽しみにも、共に同伴者が必要なのであろうか。

同師は船中の退屈な生活のうちでも、私的なことは何一つ問うこともなく、過去四年の因縁についても語らなかった。朝夕には船室の片隅の壁に小さな阿弥陀如来の掛軸をかけてお勤めもしたし、求めに応じて兵士たちを相手に説法もして、昔と変るところがなかった。私も同師の心境を察して同師の身許、経歴については一言も戦友に語らず、たゞ一人の従軍僧としてつきあうことに努めた。

われわれの船が鎮南浦に着いた時、待ち受けていたランチが近づいて来て、東郷平八郎連合艦隊司令長官が、無表情な顔で幕僚二名を従えて乗船し、奥第二軍司令官と長時間に亘って密議した。上陸作戦に関する打合せであった。その間、副官部の私たちはすることもなく退屈していると軍艦初瀬がゆっくりと近づいて来て、乗員たちが手を挙げて私たちを歓迎した。初瀬の甲板はひどく損傷していた。旅順港の沖合で敵の要塞から砲撃されたのだそうである。戦場の先輩が後続の新来者

を歓迎するにふさわしい姿である。船上の将兵たちは船橋に寄って珍らし気に飽かず眺めていた。すると初瀬からランチが降され二名の青年将校が乗って私たちの船に横づけになった。船橋に寄っている私たちを仰いだ顔は赤銅色に焼けていた。両の掌を口に当てゝ「副官殿！　見物に来ませんか！」と呼んだ。私たち副官部のものは直ぐ賛成してタラップを降り初瀬に向った。この二名の海軍青年将校は旧知のように私たちを歓迎して、艦内を案内してくれたが、その日から間もなくのこと、旅順沖で警戒中に敷設水雷に触れて爆沈し、全員戦死したとの報告を受けた。私はこの日のことを思い浮べて旅順沖の方向に合掌したことがある。

東郷、奥両司令官の長時間の密議によってまとまった作戦は、その翌日に早くも実施された。それは旅順港口に船を沈めて、港内に待機している敵艦隊の出撃を不可能にしたうえで、私たちの第二軍が上陸することであった。一言にいえばたゞそれだけのことであるが、容易なことではなかった。港口の砲台から撃ち出す銃砲撃は如何なる船舶も港口に近づけなかったし、決死隊によって近づいても目的地に接近する前に撃沈されてしまう可能性が多かった。果して第一回は十分な効果をあげ得なかった。

やがて、第二回の閉塞隊（へいそくたい）が、決死の出発をするというので、われわれは、全部甲板に出て見送った。甲板上は満員である。マストの上まで鈴生りになって、決死隊がボートで閉塞艦に乗りこむの

を歓送した。この閉塞艦を旅順港口に進めて爆沈させ、港口を塞ぐ作業である。私たちが見送ったこの第二回決死隊は、後日軍神に祀られた広瀬中佐等の三決死隊であった。彼等はボートの中から笑顔でわれわれに答礼した。その態度は落付いていて、まるで釣にでも出掛けるような気易さに見え、日焼けした顔に白い歯を光らせていた。旅順港口に散ったこの貴い犠牲によって、ロシアの東洋艦隊は、旅順港内に完全に封鎖されてしまい、わが第二軍はその翌日、ゆっくりと安全に塩大澳に上陸することが出来たのである。

上陸してからは疾風のように進撃した。日清戦争の時に進軍した思い出の十三里台を経て金州城外の南山に至るまでは、ほとんど戦いらしい敵の抵抗はなかった。南山は大連、旅順に至る途上の最大拠点であった。見渡したところ、なだらかな丘陵であるが、山麓には幾重にも厳重な鉄条網が張りめぐらされ、中腹には強固な堡塁が二十数ヶ所も見られる。しかも山頂は要塞化されて砲七十余門がわれわれに砲口を向けていた。十分に砲撃を加えてからでなければ到底手をつけられないと思われたが、わが軍には敵を沈黙させ進撃路をひらき得るほどの砲兵隊もなかったし、それほどの砲弾もなかった。私がハルピンで菊地写真館を経営していたころ、陸軍大臣クロパトキン将軍が幕僚多数を引きつれて満洲の軍事施設の建設情況を視察したうえで日本を訪問したことがある。この時に私は撮影の御用を承って館員と共に一行に随行し、この堡塁を見廻ったことがあるが、その時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com